村瀬太乙『山陽遺稿』講義録

小財陽平

頼山陽（一七八〇―一八三二）は、武家の歴史を描いた『日本外史』で名声を馳せ、明治期以降も長く愛読された当代随一の歴史家として知られている。山陽のもとにはその英風を慕って各地から多くの学生が集まった。その一人に村瀬太乙（一八〇三―一八八一）がいる。後年、尾張犬山藩儒となった太乙が、藩校での教材の一つとして頼山陽の詩集を用いていたことは、山陽の詩人としての側面を重視した所業として注目される。

太乙の講義内容は、早稲田大学中央図書館蔵『山陽遺稿』（ヘ18・825・1―3）に筆録されている（以下、「講義録」）。これは難解で知られる山陽詩読解の一助となると同時に、山陽が『日本外史』だけでなく、その詩作もまた広く受容されていたことを示すものである。太乙の講義内容を忠実に筆録したこの講義録は、当時の藩校の雰囲気を伝えるだけでなく、口語・方言資料としての価値も高い。さらには、愛弟子ならではの新知見や独自の見解も数多く書き留められており、従来の解釈や伝記事項に再検討をうながす衝迫力も備えている。

本稿では、この太乙講義録を整理し、その内容を概観した上で、その価値を見定めてみたい。

一　頼山陽と村瀬太乙

歴史家として知られる頼山陽だが、「頼襄が藝は、詩を為二第一一様に候」（天保三年九月一一日付篠崎小竹・後藤松陰宛書翰）と述べたごとく、山陽が詩人として一方ならぬ自負を抱いていたことは、すでに揖斐高氏の指摘が備わる。[1] その詩業は、『山陽詩鈔』（天保四刊）、『山陽遺稿』（天保一二刊）に結実した。これらはいずれも好評をもって迎えられ、明治期以降も版を重ねている。

山陽の詩作が多くの読者を獲得した当然の結果として、その注解を求める声が相次いだ。日柳燕石が「詩弟子某乞レ講二山陽翁之集一。予也瓦礫、在レ口不レ能二快説一。筆以代レ舌、記二管見一而授レ之云。癸丑之夏」（『山陽詩註』明治二刊）と記したのは、当時にあっても山陽の詩集が難解であり、その注釈を希望する読書子が相当数いたことを示すものである。

しかしながら、『山陽詩鈔』と比較すれば、『山陽遺稿』の注釈書は著しく僅少であるといわざるを得ない。頼惟勤氏が、

『詩鈔』の注が多いのに対して、『遺稿詩』の注は伊藤注以外には全体に渉るものはない。複数の人の視点からの注がないのは『遺稿詩』の不運であるが、伊藤注が克明にできていることは救いである。(2)

と指摘するように、『山陽遺稿』の注釈書としてまとまったものは、伊藤霞谿『山陽遺稿詩註釈』(大阪宝文館、一九三八年。一九八五年に書藝界より覆刻)に尽きる。

そうしたなかにあって、『山陽遺稿』に収める詩作のほぼすべてを講釈した、村瀬太乙の『山陽遺稿』講義録(早稲田大学中央図書館蔵)には俄然注目される。しかも、太乙は伊藤注では割愛された『山陽遺稿』詩巻拾遺の部にも施注を試みており、かつまた伊藤注とは見解を異にする解釈を提示することも多く、本書の価値をいっそう高からしめている。

『山陽遺稿』詩巻は文政九年から天保三年に至る山陽晩年の作品を収めている。太乙は文政八年(二十三歳)に山陽門に入り、山陽が死歿する天保三年(三十歳)までの八年間をそこで過ごした。つまり、『山陽遺稿』詩巻所載の作品制作時期と太乙が山陽の門下生であった期間とは重なっているのである。したがって、太乙は『山陽遺稿』所収の諸作品がどのような経緯によって制作されたのか、詩作の背景や状況などを目の当たりにしていた蓋然性が高いといえよう。

この太乙講義録は、版本『山陽遺稿』の随処に朱筆や墨筆もて直接筆録するほか、書き込む餘地がない場合は別に貼り紙を用いて記載するという念の入れようで、太乙の講釈を片言隻語も漏らさず書き留めようとする受講生の熱意が伝わってくる。筆録者が一人であったのか、あるいは複数いたのかはなお検討を要するが、書き入れの数はおびただしい分量に達しており、太乙がかなり詳細な講義を行っていたことをうかがわせる。使用版本は、富士川英郎氏の分類でいえば(3)、「一、筑波大学図書館本」と同じもののようであるが、これはごくありふれた版本である。

講義録冒頭には本書の概要・来歴について、「此の『山陽遺稿』の注解は尾藩村瀬太乙老人の講義を聞き書きするものにて太乙の門人の手に成る。筆者未詳。太乙老人は山陽に業を受くる人也。明治十七年四月　天真旧蔵(4)」と朱筆にて記載されており、門人(恐らくは藩学敬道館の学生)の手によって太乙の講義が筆録されたことがわかる。旧所蔵者の「天真」については未だ考えない。

それでは、章を改めて太乙講義の実体を検討したい。

二　講義の概要とその雰囲気

講義録のなかでもっとも多数を占めるのは、やはり詩句の訳解と典拠の説明である。まずは講義の大体の様子をうかがうべく、それらのなかからわかりやすい用例を摘んでみたい。なお、括弧内は引用者によるものである(以下同じ)。

①ありこ(蟻)が穴を穿(うが)つた如くと云ふことにて、これも家の小さい事を卑下して云ふ也。(「築室三首(三)」巻三)

②御貴公様が御帰りになると、誰も青眼で俺を見てくれる物が

ないと云ふことにて、昔玄籍（ママ）と云ふ人が気にむいた人を見る時には青眼でながめ、気にむかん人を見る時には白眼でながめ様（ニタル様ニカ）た事也。（「内藤士謙将発招吾夫妻留別於樵巷云々」巻一）

①は新しく増築した書斎（「三面梅花処」）が狭く曲がった間取りであったことを詠じた「曲如三蟻穴鑿二傍空一」に対する訳解。「ありこ」という表現は太乙の講釈をそのまま聞き書きしたものであろう。②は萩藩士内藤静修に対する送別の作。静修が出立した後は誰も自分と付き合ってくれる者などいないと嘆いてみせた「紅塵君已帰、青眼誰相視」を講釈したもので、太乙は口語訳に続いて、「阮籍青眼」（『蒙求』）の故事を説明している。なお、「阮籍」と表記すべきところを、誤って「玄籍」と記されている。これは講釈を耳で聞いたままに筆録したために、即座に正しい漢字を当てられず、誤って綴ってしまったことを意味する。[5] この講義録がまさしく聞き書きであったことを裏付ける事例だといえよう。

以上のように、太乙の講釈は日常卑近の言葉をもって詩句の解釈と典拠の解説を行うことに主眼が置かれており、これが本書の基調路線だといえる。そして、詩句をできるだけわかりやすく説明するために、太乙は様々な工夫を行っている。

たとえば、「四皓図」詩（巻一）には、漢の高祖（劉邦）に学識がなかったことを詠じた「英雄畜レ目無二丁字一」という一句がある。無学を意味する「目不レ識二一丁字一」は『旧唐書』張弘靖伝に由来する慣用句として人口に膾炙するが、ここを太乙は「眼にはいろはのいの字一字も知つてはござらん」と講釈している。「丁字」という漢語を「いろはのいの字」というように日本の文脈に置き換えて説明することで、理解向上を企図しているのである。

また、この講義録において、太乙は作品の制作背景やディテールなど山陽の身近にいた者ならではの情報を提供している。すでに述べたように、太乙は山陽晩年の八年間をその膝下で過ごした。そうした経験が講義に活かされていることも存外に多いのである。

その一例として「患喀血、戯作歌」詩（巻七）が挙げられる。これは喀血し、医者から余命を宣告された山陽が戯れにものした長篇の古体詩。そのなかで、山陽がなにゆえ喀血したのか、諸人がその理由をあれこれ思議する様子が描かれているが、最後に「童子」が登場して、山陽喀血の原因を次のように道破する。

童子進曰走意別、先生肉中本無レ血。腹中奇字僅可レ刻、賺二得杜康一争載レ酒。剣菱如レ剣岳雪雪、大福臓府受不レ起。溢為二赤縈一戒二饕餮一、咄哉此意慎勿レ説。

要するに、「童子」は山陽が詩文を揮毫した見返りとして酒造家から得た「剣菱」や「白雪」（＝「岳雪」）といった名酒を飲み過ぎたために喀血したのだといっているのである。

この「童子」の正体については従来定説はなく、漠然と門人の一人ではないかとされてきた。[6] しかしながら、講義録によれば、「童子とは牧善介の事にて……」とあり、かつまた「牧善介が右の訳を山陽に云うたら、大いに立腹をして、その様な訳はこの方に於いては聊かもありはせぬ、その様な意は急度とく事ならぬと云ひて、大いに善介を叱りつけさしたこと也」とあって、「童子」が牧百峰（通称善介）であると明記されているのである。牧百峰

といえば、太乙とは同時期に山陽の門下生となった同郷の親友である。太乙が両者のやりとりを直接見聞したか、あるいは後日百峰から詳細を伝えられていた可能性は高い。

このように、太乙講義録には山陽詩読解および伝記研究を推進させる一助となりそうな記述がまま見られるのである。そうしたものをいくつか掲げてみよう。

③これは三州泉村の都築と云ふ人が山陽の処へ海鼠腸を遣してやつたとき、其の返事に作つてやらした詩なり。（「海鼠腸」巻六）

④これは寺町の上の仙洞御書（所）近所の森の辺を帰り道に通つて来たものじやと云こと。（「十一日夜飲于後藤氏、帰途所見」巻四）

⑤雪堂老人は鴨川の東の正護院の森へ隠居して居つた人にて、太丁（大祇）山陽の処とむかいやわ（あ）せぐらいにあたると云ふ事なり。（「訪雪堂老人幽居」巻六）

③は「海鼠腸」詩の制作経緯に言及したもの。これまで本詩の制作背景は詳らかではなかったが、この記述によって「三州泉村の都築」という人からナマコの腸を贈られた山陽がその返礼として本詩を制作したことが新たに知られるのである。④は、後藤氏の居宅からの帰り道に目睹した情景を描いた作品に対する講釈。帰途に歩いたという「寺町の上の仙洞御書（所）近所の森の辺」は、山陽の傍らにいたものならではの知見だといえる。⑤は、聖護院にあった藤井雪堂の幽居の所在を解説したもの。山陽宅とは鴨川を挟んでちょうど向かい合わせの位置にあったという情報はかなり具体的で、太乙が山陽に連れられて実際に雪堂宅に足を運んだ経験があったことを推測させよう。このように太乙の講義録には、山陽の謦咳に接する機会を得た者ならではの、制作背景や具体性を帯びた記述が数多く確認され、これによって学生は臨場感をもって作品を鑑賞することができたといえる。

また、太乙は学生にとって親しみやすい口語（俗語）や方言を多用している。

口語表現としては、「（石田三成軍は）神君（徳川家康）様の関ヶ原まで御出でのことを聞いて、誠に驚きてきやつとしたことを云ふ」（「詠史」巻二）、「忠光が片方の眼の中へ魚鱗を入れて、かためつこに成つて居つても、中々あだがたきの頼朝の顔を見ちがへる様な事は一寸もないと云ふこと」（「上総忠光」巻二）、「謙信は其の歌を唄つて涙を流す様なへぼくたいことは一寸もせんこと」（「論詩絶句二十七首（四）」巻二）、「李済南の選んだ『唐詩選』はもともちやくちやなもので……」（「論詩絶句二十七首（十三）」巻二）、「華臍（アンコウ）魚を幾切りか鍋の中へぶちこんだ処が、まだ鍋の中でびちびちしてをる中に、急に喰らふことなり」（「食華臍魚歌」巻二）、「綱が今までうんてれがん（「愚行」の意）尽くして居つたのが、これからしまつてやることを云也」（「送族弟綱帰郷」巻三）、「花のつぼみがねじねじに成つてをること」（「戊子夏秋之交詠園中草木（一）」巻三）、「法華経に金をいれて奢つて拵へたのは、丁度児女がけばい化粧をする様なもので、畢竟神や仏にこびへつらう様なものじやと云ふこと」（「観厳嶋神庫詩」巻六）など枚挙するに遑がない。これ以外では、「東寺には足利の書がいつち多くて……」（「同篠承弼及諸子、観東寺古書蹟」巻三）、「灯籠は石灯籠のいつち上に置くもの」（「或

獲方広寺瓦云々」巻四)、「五剣山がどの峰よりかいつち高く聳えてをること」(「望五剣山、有懐故柴栗山先生」巻五)など、「一番、最も」を意味する「いつち」という表現が目立つ。

方言の使用例としては、「でじこじ」(「不揃い、でこぼこ」)、「……からかす」(「……しまくる」)、「ぼわれる」(「追われる」)、「ほうたぼ」(「ほっぺた」)といった言葉が多く見られる。それぞれ一例ずつ掲げると、「蓮の華や葉に筆をかけるところが、でじこじに成つてをること」(「含公獲宋槧阿弥陀経云々」巻三)、「地震の様な災難を下々へ被るのはだれそれと云ふ論はありはせぬ。だれの処でもいすっていすっていすりからかすこと」(「聞京師地震賦此遣悶」巻五)、「後醍醐も一旦中興をすることはしても、油断して又足利にぼわれて……」(「舎舟上陸過児島有懐備後三郎」巻五)、「ほうたぼのこけて居る」(「拝織田右府塑像引」巻二)といった類である。ほかには、「蚕叢は遠方へほられる(「追放」の意)こと」(「東坡賛」巻一)や「菅公が詩を沢山に自由自在にようでかされる(「仕上げる」の意)ことを云ふ」(「論詩絶句二十七首(一)」巻二)などが挙げられる。また、自身の妻を謙っていう「荊釵」は「卑下してほせくせ(「笄」の意)の女房」(「席上内子作蘭戯題贈士謙」巻一)と説明されている。

以上のように、太乙は口語・方言を多用するなど、学生にとって身近で理解しやすい講義を実践しているのである。

太乙はみずから「放屁先生」と号してところかまわず放屁し、主君の前でも長大なキセル管で喫煙をほしいままにするなど、礼教に羈束されない畸人として認知されていた。こうした常識にとらわれない太乙の性質が、口語・方言を交えた身近で肩肘をはらない講義模様に反映されているのである。しかしながら、太乙の畸人としての側面が前面に出すぎることもあったようで、講義録のなかには藩学での授業とはおもわれないような、荒っぽい言葉やきわどい放言を含んだものがしばしば見られることには注目される。

⑥清秀の心には、「郎君様でさいこの方に向いて御丁寧に御礼をせられるに、それにど憎いど奴つこめが輿に坐して平気でけつかつて、この方に方々ろくさま礼もこけがらん」と云ひて、大いに清秀がにくんだこと也。(「詠史絶句(十八)」巻五)

⑦この日本では丁度管で虎の皮を窺ひて、虎の皮の大なることを知らず、「虎の皮は金玉みた様な小さきものじや」と云ふがごとく、日本では清朝の外、えらい人のことを知らずして、そふしてただ袁倉山ぐらいの人をば「清朝でえらい人じや」と褒めてをるのは、丁度管の穴から虎の皮をうかがつてをる如くじやと云ふこと。(「夜読清諸人詩戯賦」巻二)

⑧「温柔」はおめこのことにて、春寒のとき、ふとんの中で義貞はただ勾当内侍を愛してをること也。(「十二媛絶句　勾当内侍」巻二)

⑥は、中川清秀が豊臣秀吉の不遜な態度を憎む気持ちを忖度した「郎君握レ手語嘔嘔、憎殺家奴坐在レ輿」に対する解釈。ここを「若君は非常に喜んで手を把って労をねぎらわれるのに、家臣である秀吉は、輿に座したまま声をかける小面憎さ」と訳した伊藤注と比較すれば、太乙の講釈は清秀激怒の心情が際立つ表現だといえるが、悪罵に近い放言は藩校での講義としては異例に映る。

⑦は、日本人が清人では袁枚だけを排他的に評価することの非を鳴らした「如何此間管窺豹、唯把二一袁一概二全清一」にほどこされた解説。物事の一部だけを見て、全体を批評することをいう「管中窺豹」（『晋書』王献之伝）は見識の狭さを形容する言葉であるが、「金玉」という卑俗な措辞をわざわざ持ち出す必要はなく、原文にもそれに該当する記述はない。⑧は、新田義貞が勾当内侍と契りを結んだ場面を詠じた「春寒鴛被領二温柔一」についての訳解。解釈に誤謬はないが、傍点を振った俗語はいかにも低劣だ。

太乙は藩儒であったが、けっして謹厳実直の道学先生ではなかった。むしろ、艶本『大東閨語』に序言を寄せ、淫猥な画と艶詩を得意とするなど、尋常ならざる畸人であった。この講義録には太乙のかかる一面が遺憾なくあらわれているのである。

太乙が常識にとらわれない、型破りの講義を行っていたことは、すでに向井桑人氏が「太乙先生は、儒学者にしては型破りで、「色読」ということをよく口にした彼は、常に諧謔をくわえて、聞く者のあごを外させたという。面白くくだいた話であったから、聴者がよく理解をして、あきなかった」[7]と書き記したとおりである。しかしながら、これまで講義の実体を示す資料は見つかっておらず、その様子はただ口碑に残るばかりであった。

そうしたなかにあって、本稿で取り上げた講義録は、その自由奔放な雰囲気をありありと伝えてあまりある。太乙は講義に際して、解釈や典拠の解説といった基本事項を押さえた上で、山陽門弟ならではの知見を披瀝し、口語・方言を駆使し、そして時に卑俗の語を交えながら、藩校での教育に従事していたのであった。

三　太乙の批評姿勢

太乙は山陽詩を講義するにあたって、しばしば漢詩の構成や勘所などを解説している。まずは、そうした作品分析が行われている「中秋元瑞至得蒸」詩（巻六）を取り上げたい。

煙消大月出二峰稜一、恰有三吟朋命二瘦藤一。如レ此中秋須レ有レ句、
検書不三復就二紅灯一。

中秋の夜、山陽が友人小石川玄瑞とともに名月を詠じるべく韻書を引いたが、皓々たる月光に照らされて行灯は不要であったという内容。太乙は本詩の構成について、「さて今夕はいつにないこの様なよき中秋じゃによって、御互ひに詩を作らねばならぬ。文台に書を見るには一寸もあんど（行灯）はいらんと云ふことにて、そこで初めに大月と持つてきたのも、ただは持つてきはせぬ」と指摘する。書見に灯りを要しなかったという明月を際立たせる結句を引き出すために、第一句目において「大月」を配置した、その構成の妙を感得すべしという如くである。

太乙はこうした詩作の構造的分析を頻繁に行っている。

⑨この方も酒は一寸も飲まぬゆゑ醒眼なれども、話しすることに於いては随分負けぬ様にしますと云ふことにて、ここで醒眼と云ふによって、前の我疾と云うたことがいつたりけりには、なりはせぬと太仙[8]曰く。（「喜世張来問疾云々」巻七）

⑩「尋常」は常平生と云ふことにて、この終の二句が入るにより、青燈――塵の句が留守に成つてしまひはせぬと太乙云ふ。（「再与仲穎話別」巻四）

あるいは「いつたりけりにはなりはせぬ」といい、あるいは「留守に成つてしまひはせぬ」といい、いずれも詩作を構造的に捉えた批評である。漢詩においては、詩語の配置と脈絡が重要な役割を担っているとみる太乙の鑑賞態度がうかがえよう。

⑪独りこの呑山楼が山をのむのみならず、呑山楼の主人が山の奇な処を胸にたくわへてござると云ふことにて、この二句は勘甚の句なり。（「寄題金谷烏洲呑山楼山」巻七）

⑫この詩はまことに実情で、別にかなしいと云ふ音はいわずして含んで居つて上手なものじやと太乙曰。（「喜実甫来問疾」巻七）

⑪は金井烏洲の呑山楼に寄せた作。連山を一望できる「呑山楼」の名にちなみ、楼台はもとより烏洲の胸中にも丘壑が貯えられていると賞美した「不二独此楼呑二連山一、主人胸貯丘壑奇」についての分析。書斎や楼台に詩を題する際、建物に対する賞賛の言辞を弄しつつも、それと関連させながらその所有者にも言及するのがならいとなっている。この一聯についていえば、呑山楼が山の眺望をほしいままにしていることを称えた上で、烏洲が画人であったことから、文人画の精髄を伝える「胸中元自有二丘壑一」（黄庭堅「題子瞻枯木」詩）の一句を持ち出し、現実の連山と内面の丘壑とがふたつながらに備わるとして、「呑山楼」の命名にうまく接続させたのである。太乙が「勘甚の句」と述べたのは、本詩を寄題詩たらしめる重要な要素がこの一聯に集約されていることを学生に伝えたかったからであろう。⑫は、門人で医者の神田実甫が山陽の見舞いに訪れた際に作った詩。太乙は悲哀の情を婉曲に表出した山陽の技倆を高く評価している。以上のように、太乙は詩作の構造や勘所などを詳細に分析し、これを学生にわかりやすく解説しているのである。

それにしても、太乙は先師山陽を詩人としてどのように評価していたのであろうか。講義に際して、師匠の作品を論評することに気兼ねや遠慮があったことは十分に想定される。『太乙堂詩鈔』（明治一一刊）のなかには「先師山陽翁香川桂邦翁観花於知恩院余携瓢従之追懐往時有此作」詩や「先師山陽翁三十七回忌」詩など山陽を敬慕・追懐する作品が確認される。また、太乙が歴史上の人物を詠じた全二十二首に及ぶ詠史詩の引には「頃日模二頼翁口吻一作二詠史二十二首一」とあって、山陽から詠史詩の方法を学んでいたことがうかがえる。さらに「帰途過岐阜宿本誓寺」詩によれば、太乙が折にふれて先師山陽を思い出していたことがわかる。

節近二梅天一雲易レ驚、半途卸レ担問二吟盟一。吾師有レ句君知否、雨則淹留晴則行。

名古屋からの帰り道、雨もよいの天の景色に恐れをなして本誓寺に立ち寄ったときの作。「雨が降れば一泊するし、晴れれば出発しよう」という気ままな旅心を詠じた結句は、「吾師」すなわち山陽の詩句にもとづく。山陽の七絶「過岡山宿梅坡家」詩（『山陽詩鈔』巻三）には「帰心雖レ急未レ期レ程、雨則淹留晴則行」という一聯があった。太乙は先師山陽の詩作を熟読玩味した上で、折にふれてその詩情を追体験しているのである。山陽に対する太乙の尊崇の念が伝わる例といえよう。

かく太乙が山陽のことを先師として、また詩人として尊敬して

いたことは疑いを容れない。しかしながら、太乙も詩人として一家を成した人物である。たとい山陽の詩作であったとしても、不出来の作に対しては容赦なくこれを批評して憚らない構えを見せていたことは検討に値しよう。

講義録によれば、太乙はしばしば詩作全体にかかる概評をほどこしているが、この総評において詩作の出来栄えを簡潔に評点している。具体的にいえば、「この詩はよき詩なり」（「尋杏翁三次」巻四）や「至如此詩、誠に奇々妙々で題の上に〇を二つぐらいつけてもよいと云ふこと」（「含公獲宋槧阿弥陀経云々」巻三）などが高く評価したもの。『山陽遺稿』の各詩には佳作の場合、詩題の上に丸印が一つ、よりすぐれた作品には丸印が二つ付けられている。「含公獲宋槧阿弥陀経云々」詩には丸印が付けられていなかったので、「題の上に〇を二つぐらいつけてもよい」といったのである。低評価の事例としては、「これは二首ともにどふも山陽先生には（似合）にやわん悪い詩じやと太仙云也」（「茶二首」巻一）や「この詩は四首の中で一番悪い。且又結句もどふも不宜。山陽の積りでは面白い積りかしらんが、餘り面白くないと太乙翁曰」（「戊子夏秋之交詠園中草木（四）」巻三）といったものが挙げられる。

このように山陽の詩作をこき下ろして憚らない太乙であったが、これらの概評にはときに先師山陽に対する対抗心が顔をのぞかせることもある。

⑬この位の詩なら随分外の人でもできん事はないと太仙云也。

（「題画為亡友山根士慎」巻三）

⑭この詩は誠に不出来じゃ。随分骨を折ればこの位の一詩はまねもできると太仙曰。（「送雲華師適尾張」巻二）

⑮この位の詩なら随分この方でも作つてみせると太乙先生云也。（「題鶴」巻四）

⑯この位の詩なら随分この方でも作つてみせると太乙云也。

（「原梅坡寄詩巻求評」巻六）

たとえば、山陽の作品をとらまえて誰でも作れる凡作だと断じた⑬・⑭などはまだ酷評の範疇に収まっていよう。しかしながら、この位の詩ならば自分でも作ってみせると言い切った⑮・⑯に至っては、先師山陽にもけっして引けをとるまいという詩人としての並々ならぬ自負心が、謙辞のなかに透けて見える。かかる放言はほかにも数多く確認できる。太乙は師恩にとらわれることなく山陽詩を客観視した上で、自身の技倆との距離をはかりつつ、ときに詩人としての矜持をあらわにしながら、詩作を品評していたのであった。

ところで、山陽詩に対する太乙の評価は巻を重ねるごとに、つまり山陽の晩年に近づくほどに高まってきている。高評価の概評を巻ごとに整理すれば次のようになる。

巻一　40％（五例のうち二例）
巻二　0％（五例のうち〇例）
巻三　29％（十四例のうち四例）
巻四　49％（三十五例のうち十七例）
巻五　62％（八例のうち五例）
巻六　73％（十一例のうち八例）
巻七　85％（十三例のうち十一例）

どの短評を高く評価したものとみなすか人によって捉え方が異なるであろうし、概評の数も巻ごとで一定していないので、あくまでも参考程度に留まるが、どちらかといえば太乙は山陽最晩年の作を評価する傾向にあったといえそうだ。

これらの短評のなかには特徴的な類似表現がいくつか見られる。そのなかから山陽の詩風変遷と太乙の詩観とがうかがえるものを取り上げてみよう。

⑰この位の処まではまなべると太一云。詩の句は文のごとくしるべし。（「嵐山」巻四）

⑱この詩も随分よき詩なり。詩句は文のごとくしるべし。（「鈴鹿関」巻四）

⑲この詩は如文可知。（「上隴」巻四）

⑳これは前の二首の重いせいや、どふも悪いと云ふこと。詩は文のごとくしるべし。（「除夕君彝来同守歳」巻五）

㉑至如此詩、山陽に於いて誠に面白きものなり。詩句は文のごとくしるべし。（「題画」巻七）

㉒この詩は如文可知。（「到家」巻七）

㉓佳詩なり。文やすければしるべし。（「元日」拾遺）

個々の評語によって文言に若干の相違はあるものの、太乙は「詩如文可知（詩は文の如く知るべし）」といった趣旨の短評を繰り返し用いていることがわかる。この「如文可知」という表現は、詩話などにはあまり見られず、仏典の注疏などによく見られるものだが、要するにいたずらに難解で晦渋した詩作よりも、文章のように平明ですぐに意味のとれる漢詩がよいと太乙はいっているのである。

たとえば、㉒「到家」詩は山陽最晩年の作で、十日ぶりに近江から帰った山陽が妻子とともに土産の湖魚を賞味するという内容。そこでは佶屈な表現は影を潜め、家庭での何気ない一コマが平易な言葉によってスケッチされているのである。このような温雅な作品が山陽晩年の一つの特徴だということは、頼成一氏が「晩年にはすつかり落ち着いた詩風となり、悠揚迫らざるものがある」[9]と指摘したとおりであるが、このことは山陽晩年の作を収める『山陽遺稿』詩稿巻四以降に「詩如文可知」という短評が現れ出していることからも裏付けられるのである。

山陽の作品といえば、川中島の戦いを詠出した「題不識庵撃機山図」詩（『山陽詩鈔』巻一）をはじめとする詠史詩が有名で、詩吟においてもさかんに愛唱されてきた。そうしたなかにあって、平明温雅な日常の一コマを活写した山陽の閑適詩に対して、太乙が詠史詩に勝るとも劣らぬほどの魅力を感じていたことは、当時の山陽評価にあってはいささか異例のことといえる。近時、山陽の詠史詩以外の諸作品にも注目が集まってきているが[10]、太乙の山陽詩評はそのさきがけとみなしうる。そして、かかる太乙の嗜好は「字句が平易で難解の熟語も少く、容易に詩情を感触することができる」、「容易に取り組めそうな心易さがある」[11]と評される太乙の詩風と密接に関係しているのであった。

四　太乙の山陽詩理解

山陽門下の高足たる太乙は、それ相応の自信をもって講義に臨

んでいたはずだ。そのことは前章にて取り上げた「この位の詩なら随分この方でも作つてみせる」といった言葉からもうかがえる。しかしながら、その太乙にしても、難解で知られる山陽の詩作すべてを完全に理解することは困難を極めたようだ。たとえば、「読南北史小楽府十二首」詩（巻四）に関して、太乙は「この詩は不分明の処があるゆゑ、跡へまわしてをく」と講釈を先送りしている。「跡へまわしてをく」といったものの、講義録においてこの連作についてはほかになにも記されておらず、「不分明の処」は結局わからずじまいに終わったのであろう。

太乙は山陽詩をどの程度まで理解していたのだろうか。先行研究と比較しながら、太乙講義録を読み進めていくと、しばしば詩作の解釈にズレが見られることがわかる。工具書類や検索技術の発達した現代においては即座にその正誤を判断しうる場合も多い。たとえば、「修史偶題十一首（二）」詩（巻二）には『日本外史』編纂中の様子を詠じた「蝨冊紛披煙海深」という一句がある。この「煙海深」については、伊藤注をはじめとして、頼成一注・新大系・揖斐注のいずれも「室内にたちこめる煙草の煙を形容したもの」と解釈している。しかしながら、太乙はここを「『日本外史』を書くに付きて、色々の仮名書きの本を借りて海の如くに集めた事を云ふ」というように、大量の書籍を形容する詩語と講釈しているのである。范成大が「文書煙海困二浮沈一」（「致一斎述事」詩）と詠じて、書類の山に囲まれた生活を悲嘆したように、「煙海」とは大量の物品（とりわけ書物）が雑然としていることの譬喩として通用する。山陽とはほぼ同時代に活躍した斎藤拙堂にも「漢唐以来、諸経末疏、浩如二煙海一。使三人起二望洋之嘆一」（「与猪飼敬所論学術書」『拙堂文集』巻二）という一文があった。すなわち、おびただしい数の書物に囲まれた室内を形容する詩語として、「煙海」を解釈した太乙に軍配が上がるのである。

個々の書き入れについて、逐一考察を加えたいところではあるが、紙幅の都合が許さない。そこで大幅な解釈変更を迫る事例について、その当否を検討してみたい。

まず取り上げるのは「途上感懐二首（二）」詩（巻六）である。

潢池消息首堪レ搔、西望秋風弄二怒涛一。廊廟何人労二旰食一、度支有レ吏析二秋毫一。誰駆二赤子一俄離レ乳、各鬻二黄牛一競二佩刀一。
瑤沼原謀楽二王母一、救レ饑不三肯餉二蟠桃一。

天保二年九月、山陽にとって最後の帰省となった道中での作。伊藤注によれば、第一句目は「飢饉のため盗みを働く者多き奥羽地方」での出来事を指し、第二句目は「西洋諸国の我が辺海をうかがう」ことを指すとし、尾聯を「元来、幕府というものは将軍を楽しませることのみを謀る府であって、飢渇せる窮民に救恤の手を差し伸べるなどということは、断じてしない役所なのだ」と解釈した上で、本詩が幕政を批判した憂国の情溢れる作としている。

それなりに通じないこともないが、太乙はこれとはまた別の見解を提示している。まず太乙は本詩について「これは長州が公儀よりお姫様を貰つて、そこで長州大いに物入り多く成つてきたゆゑ、無拠配下の百姓へ御用金をあてたら、誠に其の百姓達も疲れて立腹して長州の城郭の門へみな乗りこんで来て騒動を入れたこ

とがあるが、それをこの詩に含ませたものじや」と概評する。幕府の失政と全国的な政情不安、緊迫する海外情勢を詠じたとする伊藤注と比較すれば、長州藩での農民一揆を詠じたと考える太乙の見方は非常に具体性を帯びたものといえる。

史書を繙けば、たしかにこの時期、天保二年七月二六日より九月初頭にかけて長州藩では大規模一揆が発生している。いわゆる防長大一揆である。すなわち、帰省の途次、隣国長州藩での失政とそれに伴う農民蜂起を耳にした山陽が諷喩の精神を刺激されて作詩した、まことにタイムリーな作品であると、太乙は見ているのである。その上で、将軍家との婚姻によって生じた多額の費用をまかなうために農民に過度の負担を強いたことが、一揆の原因だと太乙は説明している。実際、このころ徳川家斉の娘和姫を正妻に迎えた長州藩では、将軍家から外様大名家への異例の入輿婚姻ということで莫大な出費を余儀なくされた（『毛利十一代史』邦憲公記・崇文公記）。かかる浪費の皺寄せが貧農に及び、このたびの大規模一揆につながったと、太乙が解釈したのもゆえないことではなかったのである。

もっとも、史実としては、「一揆の原因は、藩府が安い値段で各地の特産物を買い上げる「御内用産物方」を設置したことによる」というのが真相であろう（『国史大辞典』）。しかしながら、旅の途次にたまたま一揆の様子を伝え聞いた山陽が事の詳細を知悉していた可能性はきわめて低く、一揆の原因を当時有名であった和姫入輿の一件に求めたのも、むしろ当然ありうべきことである。少なくとも、尾聯に徴する限りでは、一揆の原因はかく解釈せざるを得ない。尾聯に見える「瑤沼」とは、崑崙山のほとりにある池の名。周の穆王はここで西王母と酒宴を開いたという（『列子』周穆王）。杜甫はこの故事を用いて「惜哉瑤池飲、日宴崑崙丘」（「同諸公登慈恩寺塔」詩）と詠じたが、これを政治をかえりみずに楊貴妃と睦んだ玄宗皇帝を、西王母に惑溺した周の穆王に擬え諷刺したもの。これ以降、穆王・西王母の故事は色香に眩惑された為政者を諷喩する際の常套語として定着する。以上の用例に従えば、この尾聯は民衆の苦しみをよそに女色に耽る藩主を批判したものとしか読みようがない。《穆王―西王母》の関係を《幕府―将軍》に擬して、幕政批判の作と解釈した伊藤注はいかにも苦しい。ここはやはり、「穆王は瑶沼と云ふ池の辺で西王母を楽しませることばかりを図つて居つたと云ふことにて、則ち長州侯が公儀から貰ひ請けた婦人を楽しましてござることを云也」と講釈した太乙の見解に与するべきであろう。

そうとすれば、伊藤注が奥羽地方の騒乱と解した第一句目は、防長大一揆の情報を耳にした山陽が胸を傷ませる様子を述べたものとするべきだし、西洋列強に対する脅威を詠じたとされる第二句目は、当時長州藩が大風・洪水によって甚大な被害を受けたことをいったものとするのが穏当である。[12] このように、太乙講義録には一首全体の解釈に大きな見直しを迫る重要な知見が数多く含まれているのである。

次に取り上げる「聞天民五山遇災作此歌弔慰」詩（巻四）は、独自の視点から作品解釈が行われている。

天憎㆓五山穿㆒天心㆒、月疾㆓天民出㆒月脅㆒。風怒㆓其嘲㆒雲怒㆑哂、

花木蟲魚嗔二蝶狎一。恊レ謀合レ図遣二祝融一、雲師建レ旆封二姨翣一。
天民同レ災玉池魚、梨棗半焼灰満レ牖。最痛五山罹二酷禍一、未
刻稿本空二幾箧一。半生咿嚘琢二奇語一、鉛槧数改防二躓跲一。何図
天翁久睥睨、襲焚二積聚一奪二素業一。君不レ見君曹詩已伝二万口一
沁二万脾一、何論六丁下捜掐。筆底之詩猶可レ焚、胸中之詩不
レ可レ劫。万累掃空唫身在、裸二臥天地一眠鮎鮎。徐起咳唾三千
首、清新更如二水出レ峡。題曰己丑災後集、精明一変換二旧法一。
譬如下曹瞞赤壁帰後養二生兵一、更臨二大江一耀中戈甲上。

文政一二年三月の大火に見舞われた菊池五山・大窪詩仏を慰藉した作。とりわけ、五山は未刻の詩稿がすべて焼失し、深い喪失感に打ちのめされていた。山陽は、書き溜めた詩作が失われたとしても、人々の胸中にある佳詩が損なわれることはなく、かつまた赤壁の戦いで一旦は潰走した曹操がその後、新たに兵士を訓練して覇権を握った如く、この火事は旧風を脱してさらに優れた詩境に至るための好機になるはずだと、両者を慰めている。

いうまでもなく、本詩は五山・詩仏を慰め、励ました作品である。しかしながら、太乙はまったく別の見方をしている。「この詩は実の処は、天民・五山の事をへこなして（「軽侮して」の意）、火事にあうのもよいきび（気味）じゃと云ふ様なことが含んで居るが、一寸見た位では中々しれん」。すなわち、太乙は五山・詩仏を慰藉したように見える本詩が、実際は両者の災難を嘲弄した作だといっているのである。

にわかには首肯しがたい新説だが、太乙の見方はこうだ。火事の原因は、五山・詩仏が、天や月、風・雲をあざけったり、花木虫魚を「蝶狎」（淫らに汚す）したことにあると山陽は述べているが（第一―六句目）、ここを太乙は講釈して、「風は嘲けられることを怒るし、雲は笑われることを怒り、花木虫魚は狎れて嘲斎坊にしられるのを怒ると云ふことにて、ここまで述べてきた処は、天民や五山が天や月や風や雲や花木虫魚の事ばかりを詩に作つて居つては役に立たんといわんばかりじゃ」と述べている。要するに、五山・詩仏は得意とする竹枝詞などにおいて、自然の事物を用い、遊里の諸相を描いているが、それは風雅世界を蹂躙する行為であり、そのような作品は軽佻浮薄で価値がない駄作だとして、山陽がそれとなく両者を揶揄した――そのように太乙は理解しているのである。さらに太乙は「実の処はこの両人達、今迄の様な詩を作つて居つては役に立たんによって、これから一つ心を改めて詩風を変へてしまいなされ」、あるいは「両人達今までの旧法を変へてしまつて、…（中略）…ひとつ詩を作る風を御変へなされと云うたこと也」と続け、両者に対して火事をきっかけにこれまでの悪弊を改めるように山陽が迫った作品だと見ているのである。

いささか突飛な解釈であるが、実はこの講義録にはほかにも同様の事例が確認される。たとえば、詩仏の描いた墨竹画に題した「詩仏老人竹」詩（巻一）が挙げられる。その結句に「醉毫到レ紙一枝枝」とあるのは、詩仏が酔いに乗じて竹枝を描いたということ。飲酒に沈淪するのは風流韻士のならいで、詩仏に対する褒辞と解すべき一句である。ところが、これに対して太乙は「醉うた餘りに竹を一枝かいたことにて、実は詩仏が何をかきやがると云

うてへこなしたことなれども、一寸見た位では知れぬくい」と述べて、やはりここでも山陽が詩仏を「へこな」したと解釈しているのである。

みずから「一寸見た位では知れぬくい」と述べたように、かかる特異な解釈は通例行われない。なにゆえ太乙はこうした独自の見解を示したのであろうか。現在のところ、山陽が五山・詩仏を敵視していたことを示す資料は見当たらず、むしろ、五山は『五山堂詩話』においては山陽を激賞しているし、詩仏は山陽と直接対面して詩作の応酬をするほどの仲であった。あるいは、五山・詩仏とは表面的な交流に過ぎず、山陽は太乙ら愛弟子の前では両者を批判して憚らなかったのであろうか。いずれにしても、こうした特異な解釈が山陽の膝下にあった太乙によって提唱されていることは注目に値する。山陽が詩仏・五山といった詩壇の寵児に対していささか含むところがあったことをうかがわせるからだ。[13] そうでなければ、太乙がかくも不可解な講義を展開した理由が見つからない。このように、太乙講義録には日頃より山陽と身近に接していた太乙ならではの、独自の視点から特異な作品解釈が行われており、今後の山陽研究に一つの課題を突き付けているのである。

結語

本稿において、まずは太乙講義録を概観し、その特徴を整理した。これによって、口語・方言を駆使し、時に卑俗の言をもはばからない太乙の講義が、学生にとって親しみやすい、自由な雰囲気に満ちたものであったことを具体的に跡付けることができた。そして、太乙が先師山陽の詩作を遠慮なく品評していたことを確認した上で、そこには太乙の詩人としての自負や山陽に対する対抗意識が横たわっていたこともあわせて指摘した。また、太乙が詠史詩ばかりに目を向けないで、平明温雅な表現で日常の一コマを詠じた山陽最晩年の作品にも高い評価を下していたことに言及し、太乙自身がかかる詩作を得意としていたことがその背景にあると推論した。さらには、この講義録を用いることで、先行研究の誤謬を訂正しえたり、新たな解釈の可能性が生じたりすることを述べ、これまで知られていなかったこの講義録が山陽研究においてすぐれた価値を有することをあらためて指摘した。

本稿で取り扱ったのは大量の書き入れのごく一部に過ぎない。また、漢詩研究という立場からのアプローチにとどまった嫌いもある。今後は、講義の全貌を究明するべく、教育史や国語学の見地からも検討を重ねる必要があるだろう。

注（1）揖斐高『頼山陽詩選』（岩波文庫、二〇一二年）。

（2）水田紀久・頼惟勤・直井文子『菅茶山　頼山陽詩集』（新日本古典文学大系66、岩波書店、一九九六年）。

（3）富士川英郎・松下忠・佐野正巳『詩集日本漢詩』第十巻（汲古書院、一九八六年）。

（4）書き入れはもと漢字カタカナ交じり文であるが、読者の便を考慮して読みやすく改めた（以下同じ）。なお、本書は「古典籍総合データベース」にて全文公開されているので、あわせてご確認いただきたい。

（5）このような筆記ミスは人名・地名などに多く見られる。ほかにも

目についたものだけでも、「四皓と云ふ人は漢高祖の時代に湘山（正しくは「商山」）に隠居して……」（「四皓図」巻一）や「貞所南（正しくは「鄭所南」）と云ふ人が書いたものなり」（「題或画露根蘭」巻二）、あるいは「今三絃の声も人形（正しくは「人魚」）が涙をはぢく様な音がすると云ふこと」（「戯作三絃詞」巻三）などが挙げられる（傍点は引用者による。以下同じ）。

（6）頼成一・伊藤吉三（霞谿）『頼山陽詩抄』（岩波文庫、一九四四年）には、「童子」について「門人」と記載されている。

（7）向井桑人『村瀬太乙』（愛知県郷土資料刊行会、一九八一年）八一頁。

（8）従来「太仙」の呼称は知られていなかったが、文脈から太乙の別号と考えられる。

（9）注（6）同掲書三二〇頁。

（10）詠史詩以外の作品にも高い評価を下したものとしては、富士川英郎『江戸後期の詩人たち』（麥書房、一九六六年）、中村真一郎『頼山陽とその時代』（中央公論社、一九七一年）、入谷仙介『頼山陽 梁川星巌』（江戸詩人選集8、岩波書店、一九九〇年）、揖斐高『頼山陽詩選』（既出）などがある。

（11）注（7）同掲書七八・七九頁。

（12）太乙は首聯について、「周の穆王と云ふ天子が潢池と云ふ池のそばで西王母と云ふ婦人に戯れてござつた事がある。今其消息を聞けば誠に首を掻いて嘆くに勘へたりと云ふことにて、則ち長州侯が公儀から貰ひ請けた婦人に戯れて居ることを云ふ。且又それに西海で大風にて大波で、皆民百姓が困つて居る処也」と解釈している。第二句目は妥当であろうが、第一句目については尾聯に引きずられて誤読している。「潢池」とは伊藤注が指摘するように人民蜂起を指す語であるから、これを西王母と結びつけることはできない。太乙が「潢池」と「瑤池」とを混同したか、学生が聞き間違えたのであろう。

（13）江湖詩社の盟主市河寛斎のことでいえば、「論詩絶句二十七首（十四）」詩（巻二）には「文化何二如正徳春一」の一句がある。これは正徳・享保時代の詩の方が文化年間の詩よりも優れていたことを詠じたもの。しかるに太乙は「文化比は中々正徳年々の様にはいかまいと云ふことにて、これは寛斎が文化年中に名を振つて居つたゆゑ、そこでこの詩は暗に寛斎の事をへこなしたものとみへる」と述べている。文化年間には市河寛斎以外にもすぐれた詩人として菅茶山らもいたはずだが、太乙はとりわけて寛斎を「へこな」した一句と解釈している。